劇団自由人会

# 2021年度 劇団新聞 STAGE INFORMATION

## 春号

発行　劇団自由人会
発刊　2021年1月

〒655-0047
兵庫県神戸市垂水区東舞子町7-17
ｺﾞｰﾙﾄﾞｳｯｽﾞ舞子ﾋﾞﾙ4F
[TEL]　078-784-3701
[FAX]　078-784-3610
[E-mail] kobe@jiyuujinkai.jp
[URL]http://www.jiyuujinkai.jp

**facebook、twitter、blog 更新中**

各種イベントや客演情報のお知らせはもちろん、役者やスタッフ達のブログなど、自由人会の情報が盛りだくさん！
劇団web siteへAccess！

2020年は新型コロナウイルス感染症の影響で社会的にも非常に大きな変化をもたらし、劇団も存続の危機に陥りました。皆様には寄付金という形でご支援、ご協力をいただきましたこと、劇団員一同心より感謝申し上げます。しかし鑑賞会は中止が相次ぎ、「幕末青春伝」は巡演中止という苦渋の決断をせざるを得ない状況となってしまいました。多くの関係者の皆様に多大なるご迷惑をおかけしましたこと、心よりお詫び申し上げます。今年はこの状況下で私たちの出来ることを見出し、これまで以上に邁進してまいります。何卒、変わらぬご声援よろしくお願いいたします。
2021年度は劇団代表作でもある「カーリーの青春」がリニューアルし全国巡演を開始します。「夢をかなえるゾウ」と共に、劇団２大作品として再び全国の皆様にお会いできる事を願っております。

ひょうご演劇祭　夏休みファミリー劇場

## うちへ帰ろう

**あのちびっこトマス・ジェイが帰ってくる！**
**おじいちゃんとトマスの絆は永遠に・・・。**
**ファミリーで楽しめて、ほっこり心豊かになれる愛の物語。**
**今年の夏休みはみんな揃って劇場で会おう！**

**今夏、公演決定！**

**2021年8月21日(土)**
**兵庫県立芸術文化センター**
**阪急中ホール**

## カーリーの青春 ～again～

原作／Ｂ・バイヤーズ
脚本・演出／ふるかわ照

「コロナ禍で公演を迎えて」

コロナ禍で、直前まで実施するか否か苦悩した公演でした。感染の恐怖を抱え、「こんな時に演劇なんて」と罪悪感を吐露する者も出るほどでした。しかし、今私たちが公演を諦めるということは、同じように葛藤するどこかの演劇仲間も諦めてしまうという事。それは演劇を生業とする者の首を絞め、お客様を裏切り、先人が築き上げてきた演劇文化の衰退を意味する。「演劇は必要だ」、その事を信じて幕を上げなければいけない。それが私たちの責務ではないか、そう話し合いをしました。そうして本当に多くの方々に支えられ生まれた「カーリーの青春～again～」でした。「どんなことがあっても私たちなら乗り越えていける」主人公カーリーの山場の台詞です。私たちも二度と挫けません。お客様の為、幕を上げる為にはどんな困難も乗り越えていく気概を持って、今年は全国巡演へと乗り出します。お楽しみに！

**絶賛動画配信中！**

**演劇動画配信サービス「観劇三昧」にて無料配信中！**

**スマートフォン、タブレット パソコンより「観劇三昧」にアクセス！**

※アプリのダウンロード
会員登録(無料)が必要です。

２０２０年９月１９日（土）
兵庫県立芸術文化センター
阪急中ホールにて
無観客公演収録

## 2020年を振り返る ― 日本の芸術文化の大きな転換期に立つ ―

まず初めに、２０２０年７月下旬に劇団内で感染者を出し、そのことでは多くの方々にご心配ご迷惑をおかけいたしましたこと、心よりお詫び申し上げます。
その後８月中旬には活動を再開し、体験したからこそ知り得た感染対策を強化し、皆さまのお力添えを受け今日公演を続けることができています。
今回の新型コロナウイルス感染症感染拡大は私たちに大きな課題をつきつけました。
この新型コロナが世界中を脅やかし始めてすぐに、ドイツの文化相は次のような声明を打ち出しました。
「芸術家と文化施設の方々は、安心していただきたい。私は、文化・クリエイティブ・メディア業界の方々の生活状況や創作環境を充分に顧慮し、皆さんを見殺しにするようなことはいたしません！我々は皆さんのご不安をしっかり見ておりますし、文化産業とクリエイティブ領域において、財政支援や債務猶予に関する問題が起こるようであれば個々の必要に対して対応してまいります。アーティストは今、必要不可欠な存在であり、生命維持に必要だからです。」と。
そしていち早く芸術家たちの助成に動きだしました。この声明は日本のメディアでも大きく取り上げられ注目を集めました。
しかし我が国では、芸術が生活において必要不可欠な存在であり、このコロナ禍を乗り越えるまでの痛みの共有を、国をあげて考えることができるとは到底思えません。演劇が日本において「不要不急の芸術文化」として成長していくには私たちのこれからの活動にかかっているのではないかと痛切に感じています。
私たちは今から約25年前の阪神・淡路大震災で稽古場や事務所、住居など多くのものを失いました。一瞬の出来事で６０００人以上の方々がなくなり、ライフラインは断ち切られ恐怖と不安な日々を送りました。でも日本中の沢山の方々の励ましや支援もあり、復興と言う光に向かって少しずつ歩みを進め、そして明日がくる事の喜び、日常の大切さを感じたものです。今回のコロナでも日常の大切さを痛感することとなりました。でも震災の時と違い、日本中いや世界中の人たちが同じ状況にあることでどこへも助けを求められないこと、又この感染への恐怖の終わりがいつくるのか全く予想出来ない事など、震災の時以上の恐怖と不安に包まれる毎日を送っています。
特に感じるのは、今回のコロナはソーシャルディスタンスやリモート配信など人と人との繋がりを分断せざるを得ない社会形態を創りださなければならなかったことです。私たちが震災を乗り越えることができたのは、「大丈夫」と言って強く抱きしめてくださった人々の温もり、震災直後遠くから炊き出しに訪れ「頑張れ」と肩を叩いて下さった人たちの声等が生きる力となったのではないかと思っています。ですからコロナが収束すれば、一番大切になることは、人と人が同じ空間を共有してそこから生み出される「連帯感」なのではないでしょうか。
その為にも演劇は必要不可欠です！私たちは今、日本の芸術文化の大きな転換期に立っているのかもしれません。

劇団自由人会代表　森もりこ

# 夢をかなえるゾウ ～青春ロボット編～

原作／水野敬也『夢をかなえるゾウ』(飛鳥新社刊)

## 大好評全国巡演中！

「待ってくれている観客のために」

脚本・演出／杉野じんべえ

Theaterという言葉には劇場と演劇という二つの意味があり、両者を切り離す今は危機的状況です。そのような中、私もリモート配信での演劇授業や舞台稽古を実施したり、劇団では本公演のリモート配信をしたりと色々な方法で演劇の創造を試みましたが、結果としてこれらの方法は斬新ではあるけれども採る意味が薄い苦肉の策と言わざるを得ないものになりました。

そもそも演劇は、他の芸術分野が最新テクノロジーや時代に即した鑑賞方法を取り入れているのに、相変わらず“決められた場所と時間に集まり、肉体で表現するアナログな芸術を鑑賞する”という手法を取り続けています。テレビですら利便性等でYouTubeやSNSに取って代わられつつある時代に、時代錯誤も甚だしい。しかし、逆説的に言えば、舞台上の俳優がその肉体でダイレクトに観客と語り合う凄みは、ネットやSNSで手軽で安価に手に入るものとは五感で味わう芸術のレベルが圧倒的に違う。リモートで劇場空間と同等の環境を作り上げようとすると、まず演出家は画面の向こうの部屋で鑑賞する観客の視聴環境をどう作り上げ、どう演出するかというところから考えなくてはならず、それは中々に難しいのです。少なくとも私の場合、演者と作り手と観客がお互いを感じ心を動かしあう演劇は、やはり劇場に集ってこそ創造できるものだと痛感しました。

学校で年間行事がほぼ中止になっていく中、おこがましくも、せめて芸術鑑賞会だけでも私たちが環境を整備して、ひとつでも学校生活の思い出に残る行事として実施することが出来ればという一念で活動しています。現在のコロナ禍で、今を生きる若者は多くのことを我慢して、諦めているかもしれません。大変な現状ではありますが、この先の将来でも、我慢したり諦めたり、色んな壁にぶつかって人生の選択を迫られる時が来るかもしれません。その時自分はどう生きるか。夢を捨てずに進むのか、別の道を行くのか。劇場でそのヒントを見つけてもらえるような“夢ゾウ”になれるよう、今年も励んでまいります。

劇団自由人会

# カーリーの青春 ～again～

原作／B・バイヤーズ「うちへ帰ろう」

## 2021年度より巡演開始！

脚本・演出／ふるかわ照

「カーリーの青春」は、私が劇団の要請を受けて、初めて青少年の観客の為に書いた作品である。もう40年も昔のことであるが、その頃のアメリカの児童文学は日本にはない近代的な伝統があり、図書館には完成度の高い児童文学の名作が並ぶ時代であった。「カーリーの青春」の原作であるB・バイヤーズの「うちへ帰ろう」もその秀作の一つである。その頃の日本社会にはまだ馴染みのない里親制度や児童虐待の問題をテーマにした注目の作品であった。

私はテーマからしても社会性の高い作品に仕上げなければいけないと舞い上がってしまい、図書館で原稿用紙を前にただ頭をかかえる毎日であった。そんな時私の席の隣に座った女子高生がじっと詩集に目をやっていた。リルケの詩集であった。

愛はどんな風に君にやって来たかー
それは照る陽のように
あるいは花吹雪のようにやって来たか
それとも一つの祈りのようにやって来たかー
話したまえ

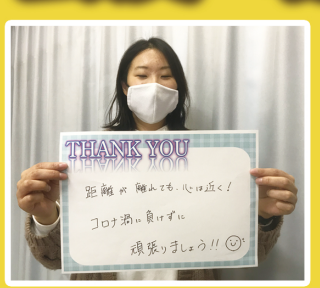
この詩と出会ったことで、私の突っ張っていた肩の力が抜け、そうだ愛の物語でいいのだ！と、私の心はフル回転で動き出しドラマが組み立てられていった。

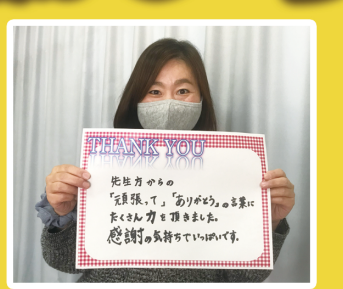
「愛」と言う人間にとって普遍性の高いテーマにしたおかげで、この作品は40年近く上演されもうすぐ1800回を迎えようとしている。

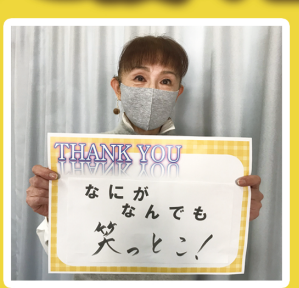
私たちが初めて体験したパンデミックの脅威に晒された今でさえ、愛は変わることなく生き続けているのだ。

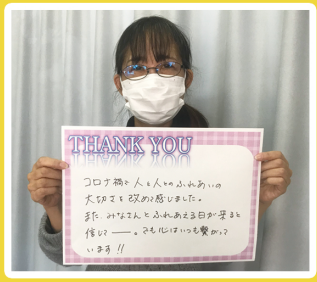
どのように愛が舞い降りるか、恐怖と不安な中でも光を見出す事ができるだろうと期待しながら旅は続いている。

# 公演へ繋がる一歩を積み重ねて―






## 劇団自由人会 制作部 今私たちに出来ること

劇団制作部はお客様を組織する縁の下の力持ちです。そんな制作部の２０２０年は２０１９年度３学期実施学校の「公演キャンセル」から始まりました。そして３月上旬には２０２０年度１学期の学校公演全てを失う可能性が浮上、このままでは劇団と公演関係者の死活問題となる事を予感しました。しかし相手は未知の新型ウイルス、直近の公演中止は致し方ありませんでした。ただ、私たち芸術団体が安易に「公演キャンセル」を受け容れては、日本中に存在する公演を糧とする芸術団体が潰れるのではないかと背筋が凍りました。「１公演でも守らなければ」制作部全員がそう考えました。緊急事態宣言で出勤もままならない中、緊急会議を何度もオンラインで行い、４月早々には劇団の指針を固め、文書とお電話で実施予定校へ案内をしました。公演中止は免れないとしても、来年度への延期をお願いしたのです。さらに６月以降の実施予定校にはひとまず公演可否判断の留保をお願いしました。今後の動向を見極め、公演実施の可能性を探る為です。その後立ちはだかったのは50％という客席制限でした。これには公演の機会を最優先し、大幅な経費増を飲み込み２回公演の提案をしました。またエビデンスに基づいた感染対策をご説明、会館使用のガイドラインの確認等状況に応じて都度交渉を重ね、今年の約60校に、たった５名の制作部員が必死で働きかけを行いました。状況が変わるたび契約書を何度も書き直し、その情報共有にも四苦八苦しました。例年より数倍分厚い各公演の記録ファイルを見返すと、この10か月の制作部員一人一人の努力が垣間見えます。そしてなにより心を打たれたのは、先生方の良心でした。多くの先生方が休校や行事変更など大変な状況の中にあることは想像に難くありません。にも拘らず、私たち劇団の訴えを真摯に受け止めて下さり、更に「こんな時だからこそ生徒に演劇を見せたい」と公演実現に奔走してくださいました。こんなに素晴らしい先生方が日本の教育を支えているのだと度々感動しました。

最後に２０２０年度４月～12月までの公演状況をご報告します。コロナ禍によって本来鑑賞をする筈だった約３５２３２人の子どもたちが演劇に触れる機会を失いました。残念でなりません。が、一方で先生方の熱意によって今年７７５５人の子どもたちに演劇をお届けする事が叶いました。また約６割の学校が来年度延期のご対応を賜り、約２６３７６人の子どもたちの鑑賞の機会が守られました。制作部一同、心より皆様に感謝を申し上げます。